

Giant salamander in natural history illustrations  
of the late Edo period :  
Comparison of “*Suizokushijo*” and “*Gyofu*”

HAGANO Fumiko

The natural history illustrations, which aim to accurately depict and record living things, developed in Japan from the middle to the late Edo period (around 1750-1860).

The main theme of Edo's natural history illustrations was the flora and fauna. There is a wide range of drawing objects such as flowers, birds, mammals, insects, fish, amphibians and reptiles. The authors of natural history illustrations go outside to keep a record of living animals from all over Japan.

In this way, as the animals that inhabit Japan continue to be recorded one after another, the world's largest amphibian that has inhabited Japan since ancient times, the giant salamander, has been particularly characteristic.

The giant salamander has been witnessed as an object of study described in many documents from the Asuka period to the Edo period.

This paper, focusing on Okukura Gyosen's (? -1859/1869) “*Suizokushijo*” and Ono Ranzan's (1729-1810) “*Gyofu*” depicting the giant salamander captured in the *Shakujii* River on June 12, 1801, it will be clarified how the same giant salamander is described and drawn.

Then, I would like to consider what they thought of the giant salamander and what kind of intention they made to the natural history illustrations.

## 江戸末期の博物図譜におけるオオサンショウウオ ——『水族四帖』と『魚譜』の比較から——

波賀野 文子  
HAGANO Fumiko

### はじめに

生物の姿形を正確に描写し記録することを目的とした博物図譜は、日本では江戸時代中期から末期(1750年頃～1860年頃)にかけて発展し、数多くの図譜が生み出された。

博物図譜の制作が盛んとなった18世紀には、讃岐高松藩5代藩主の松平頼恭(1711-71)を中心とした博物大名たちが、自身の博物学的好奇心のために絢爛豪華な図譜を競うように作らせた。なかには自ら生き物を観察し、筆をとる大名もいた。今橋理子氏が指摘するように、博物図譜は現実の自然界に存在するものをそのまま絵に写し取ろうという態度から発しているため、図譜には対象物に対して客観的かつ忠実であることが求められた<sup>1</sup>。

19世紀に入ると、博物学的高まりは医師や博物学者、さらには市井の博物学愛好家たちにまで及んだ。大名たちが作らせた図譜の多くは、彼らによって転写が繰り返され、それを元に新たな図譜が制作された。このように図譜の作者の裾野が広がるにつれて、実物に忠実なだけでなく、見る側の想像を掻き立てるような、作家独自の描写が増えていく。

江戸の博物図譜の大勢を占めた主題は、なんらかのかたちで生活と結びついた動植物であった<sup>2</sup>。描画対象は、花鳥や哺乳類はもちろんのこと、江戸時代において「蟲」と総称されていた昆虫、両性爬虫類や魚類などの水族まで、多岐にわたる。19世紀には、自らの足で現地取材に赴き、徹底して観察と写生を行うという「行動本草学」の考えが浸透し、図譜の作者たちは日本各地の生物を記録すべく、積極的に戸外へと写生に赴くようになる<sup>3</sup>。このように、日本に生息する生物が次々と記録されていくなか、図譜の対象となった生物でとりわけ異彩を放つのが、日本古来より生息する世界最大級の両生類、オオサンショウウオである。

オオサンショウウオは、飛鳥時代から江戸時代にかけて多くの文献に情報が記載されており、もっとも古い記述は619(推古27)年、「近江国蒲生川で、人のような形のものである(日本書紀)」という、オオサンショウウオと思しき目撃情報が残されている<sup>4</sup>。また、1683(天和3)年、天和年間(1681～本年)、「武州の牛込高田川で捕獲する、長3尺(日東魚譜)<sup>5</sup>」など、特

に江戸時代は発見されるたび捕獲され、将軍に上覧されたり見世物になっていたことから、オオサンショウウオは、人々の生活の場の近くに生息していながらも、その姿形の特異さで、目撃されるたびに強烈な印象を当時の人々に残していたことが伺える。現代ではオオサンショウウオの生息域は岐阜県以西に限られるが、江戸での目撃情報が3件あることから、関東にも生息していた可能性が指摘されている<sup>6</sup>。

現代においても、オオサンショウウオの生息域である京都鴨川では、大雨などで上流から北山、出町柳など下流域へと流されてきたオオサンショウウオの画像や動画がSNSにあげられ、一躍話題となる事例が複数確認されている<sup>7</sup>。江戸時代の人々と同じように、オオサンショウウオの持つ独特で奇怪な風貌が、今なお人々に大きなインパクトを与え続けていることが分かる。

一方で、これだけ姿形の特徴が際立つ生物でありながら、博物図譜の描写対象とされた例はけして多いとは言えない。筆者が現時点で確認できたオオサンショウウオ（幼生を含む）を描いた図譜は10点にとどまる。

本稿では、オオサンショウウオを描いた数少ない図譜の中から、1801（享和1）年6月12日に石神井川にて捕獲された個体を描写したと思われる、江戸神田の青物屋主人奥倉魚仙（?-1859/1869）<sup>8</sup>、京の博物学者小野蘭山（1729-1810）が残した二葉の図譜に着目し、同一の個体をどのように描き、何について記述がなされているかを明らかにする。そして、同時代を生きた人々がオオサンショウウオにどのような思いを抱き、何を伝えようとして図譜を残したのか考察する。

魚仙は、江戸神田多町2丁目甲賀屋（青物屋）の長男として生まれた。本名は辰行。自ら魚仙と名乗った。幼少より絵を嗜み、植物から生物まで何でも巧みに描いたという<sup>9</sup>。その画才を、神田湯島の著名な書誌学者狩谷棧斎（1775-1835）に見出され、20年以上にわたり魚の購入費などの支援を受けながら、日本橋の魚市場にて写生と調査研究を行った。また、江戸のみならず関西、山陽、四国、九州など日本各地へ赴き、地域の珍しい魚を記録すると共に漁師や魚商などから水族のあらゆる特徴を聞き出し、一千種以上を蒐集した。

魚仙の図譜の解説には彼が現地取材で得た情報が惜しみなく記載されている。例えば、水族四帖の頁には形態、魚が取れる地での呼称、味、和漢書からの引用など詳細が記載されている。

蘭山は、京都桜木町で主殿大允佐伯職茂の次男として生まれた。13歳の時から、父の師であった松岡恕庵に本草学を学ぶ。ところがまもなくして恕庵が死去したため、以後は独学で本草学を学ぶこととなる。蘭山以前の本草学は、中国から伝わった明の本草学者李時珍（1518-1593）の著書『本草綱目』を元に作られ、日本固有の動植物にはほとんど対応していなかった。そのことを憂えた蘭山は、自身が行動本草学を実践し、日本の各地に出向き観察や収集を行った。

1799年には幕命により江戸に移り、医学校教授方として後進の指導にあたった。代表的著書『本草綱目啓蒙』は全48巻が刊行され、日本最大の本草学書となった。『本草綱目啓蒙』にはサンショウウオについての記述も見られる。

まず、第1章において、図譜の「図」、図像の分析を行い、それぞれの図の特徴、作者の狙いについて論じる。第2章では、図譜の「譜」、テキストに何が記述されているか、記載内容を読み解き、作者がオオサンショウウオの何に着目し記述をしたのかを明らかにする。第3章において、前章の記述に基づき、二葉の図譜のテキストと図像、実物の写真の比較対照を行い、奇異な生物であるオオサンショウウオをそれぞれの作者がどのような目線でテキスト、図に落とし込んだのか検証する。

## 第1章「図」による分析

ではここから、図譜の図像分析を始めていこう。筆者は2図共に、国会図書館にて現物史料の調査を行なった(2019年3月)。

### 第1節 奥倉魚仙『水族四帖』

【図1】は、魚仙筆のオオサンショウウオである。図譜中央にオオサンショウウオの成体、成体のすぐ左下には幼生、さらに左側にはハコネサンショウウオが描かれている。まずオオサンショウウオの成体に着目すると、画面手前に大きな頭、奥へ胴体と脚が描かれている。体の外側に向けて色が薄くなるようグラデーションを用いた着彩と、一面に描かれた暗褐色のまだら模様とも相まって、オオサンショウウオの体の奥行きと立体感が表現されている。また、本図は斜め上から見下ろした単視点で描かれており、魚仙は実際にこの角度から写生をしたのではないかと思われる。

また、実際のオオサンショウウオは指先の色が白くなっているが、それを表現したのか指の先に白い爪のような描写も見られる。実物に忠実な、丸みを帯びた指先を描いていることが図から読み取れる。また、幼生を成体のすぐ近くに配置することで、成体の巨体を際立たせ、大きさのコントラストを克明に伝える狙いがあったと考えられる。

このように魚仙は対象を観察した上で描いており、モチーフに対する徹底した写生を信条とした魚仙らしい正確かつ緻密な描写といえる。

本図で注目すべき点は、形態を表現するために用いられた画材である。オオサンショウウオの体全体には、雲母と思しき画材が筆で薄くかけられている。雲母は現代でも描画材として用いられる鉱物であり、その光沢のある白は、画面に細やかな艶と煌めきを与えるのに効果的で



図1 奥倉魚仙『水族四帖 春 サンセウオ』1855年-1857年頃 国立国会図書館

ある。オオサンショウウオの特徴の一つであるぬめりのある皮膚を表現するためには、前述したような描画効果が得られる雲母を使用することが最適だと、魚仙は考えたと思われる。また、描線と模様には墨、一部に紅も使用されていると推測される。

幼生の図は別の紙に描かれており、本図譜に貼り付けられている。この幼生と近似した図が、栗本丹州筆『千蟲譜』(1811年序)の中に存在する。【図2】

この2図を比較して分かるように、魚仙のオオサンショウウオの幼生【図3】は、丹州の図の幼生から転写していることがわかる。丹州の左の個体が魚仙の下の個体、丹州の右下の個体が魚仙の上の個体とそれぞれ一致する。丹州の描いた幼生たちはエラの一本一本、指の数が丁寧に描かれ、精緻な描写である。この図を転写したと思われる魚仙は、形態を正確に転写しつつもその筆致はより軽やかになり、可愛らしい表現へと変化している。魚仙は、オオサンショウウオの成体こそ実物を目撃できた可能性が高いが、現代においても野生下での発見と観察が殊更に難しい幼生は、おそらく見る機会がなかったのであろう。

このように、魚仙は写生と観察をしっかりと行う一方で、自身が目にする機会を得られなかった生物に対しては、先人の優れた図譜を転写することで知識を補い、図譜を充実させたのだと推察される。



図2：栗本丹州『千蟲譜 下 サンセウウオの初生』  
部分 1811年序 国立国会図書館



図3：『水族四帖 春 サンセウウオの子』部分

## 第2節 小野蘭山『魚譜』

次に、蘭山の図を検証していく。全て自筆の魚仙に対し、蘭山の魚譜は転写本ということもあって図ごとに文章の筆致、絵柄が異なり、制作に携わった人物が複数いたと考えられる。『魚譜』においては蘭山はあくまで編纂者であり、図を描いたとは考えにくく、作者が別にいたと思われるが、詳細は不明である。

ここで注目すべき点は、オオサンショウウオが見開き3頁にわたって描かれていることである。【図4】、【図5】、【図6】

図譜の頁を開くと、見開きいっぱいのオオサンショウウオの大きな頭と脚、胴体が現れ、見る側に大きなインパクトを与える仕掛けとなっている。大胆に引かれた墨の線と、どこか愛嬌が感じられる表情、今にも泳ぎだしそうな軽やかな四肢の動きが、オオサンショウウオの躍動感を表している。

描線と体全体の着彩には墨が用いられ、魚仙と同様体全体に薄く雲母がかけられている。その他に紅、黄土、胡粉を使用していると推測される。特に胴体の襞は墨、黄土、胡粉と、徐々に色が淡くなるようグラデーションで表現されており、体の外側へ向けて皮膚が薄くなる襞の様子が、忠実に表現されている。口の中が白く描かれているのも興味深い。実物のオオサンショウウオの口の中は白に近い淡いピンク色で、本図の作者はオオサンショウウオが口を開けた様子を実際に目撃した上で描いた可能性もある。



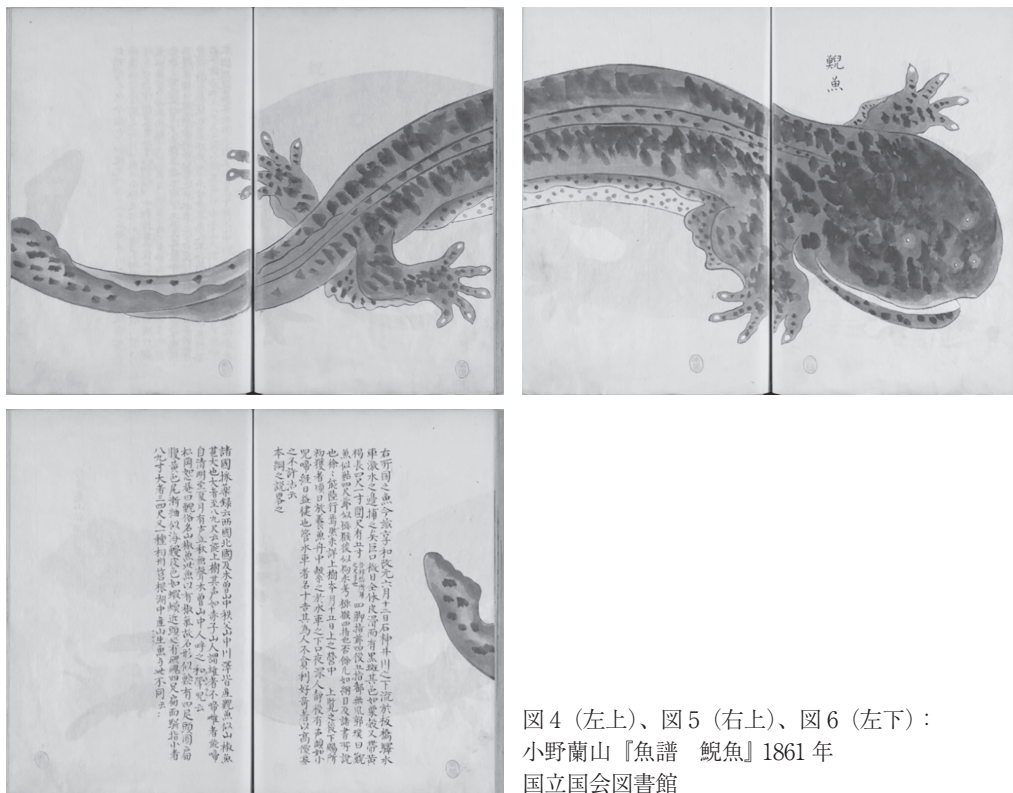


図4 (左上)、図5 (右上)、図6 (左下) :  
小野蘭山『魚譜 鮎魚』1861年  
国立国会図書館

また、単視点から描いた魚仙とは異なり、本図では多視点が用いられており、頭は斜めから、胴と四肢は真上からの視点で描かれている。オオサンショウウオの二大特徴と言える顔と四肢全てを画面に収めるためには、多視点をを用いた表現は必須であり、作者は「オオサンショウウオがどのような形態をしているか」を最も重視して描いたのであろう。

『魚譜』では、オオサンショウウオ同様、大型の魚に見開き3頁を用いたものも見受けられ【図7】、【図8】、【図9】、生物の大きさを書面で伝えるのに効果的な手法だと考えていたことが分かる。本図のオオサンショウウオは、けして描写力に優れているとは言い難いが、ただの形態描写にとどまらず、生命力あふれる描写が印象的で、口元は笑っているように大きく開いている。実物を正確に描くことにあまり重きは置かれず、大胆な構図を用いた独創的な描き方、いわば現代にも通ずるキャラクターに見える。この図譜を描いた作者は、実際のアングルの正確さより、オオサンショウウオのうごめきと躍動感を第一に記録したいと考え、この図譜の制作に至ったのだと思われるのである。

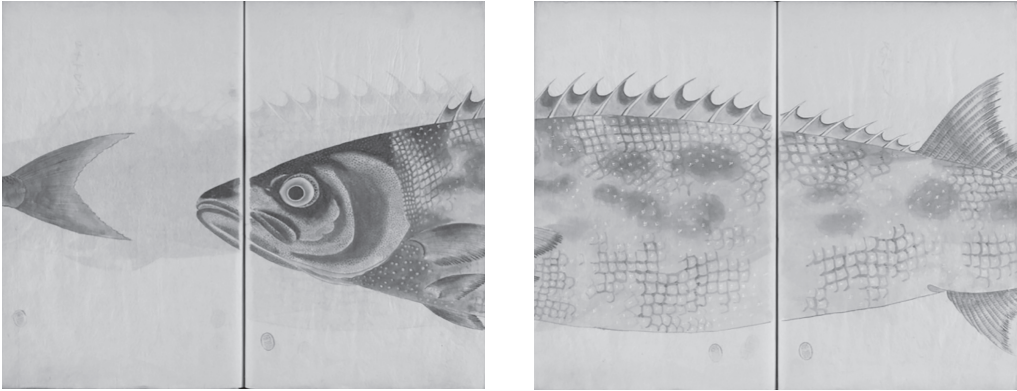


図8 (左)、図8 (右)：『魚譜 スギザメ』

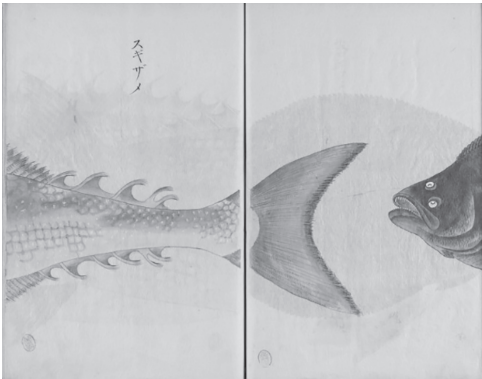


図9 (上)：『魚譜 スギザメ』

## 第2章 「譜」による分析

本章では、魚仙と蘭山の経歴と共に二葉の図譜のテキストに着目し、どのような記述がなされているか検証していく。図譜の原文と現代語訳(意識)を交えながら分析を行う。<sup>10</sup>

### 第1節 奥倉魚仙『水族四帖』

一つ目の図譜は魚仙筆『水族四帖 春・夏・秋・冬』(1855-57年頃)である。計4冊から成り立ち、計193頁の彩色画が描かれている。水族を主題とした図譜で、タイやメバルなどの身近な魚類が図譜の多くを占める。【図10】

では、オオサンショウウオの項目には何が記述されているのか。  
まず、原文の冒頭には、



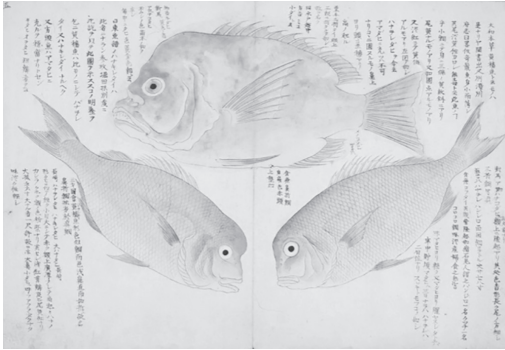


図10 『水族四帖 ハナキレタイ』

同じく江戸神田の生まれで、丹州は魚仙に自ら所蔵する図譜を見せ、転写も自由にさせていたという。身分は違えど互に行き来し、しばしば会合して魚類を研究する間柄であったようである<sup>11</sup>。

蘭山先生ノ説ニ俗名山椒魚ト云美作國ニテハンザキト云（中略）諸國採薬録ニ木曾山中ニテオギヤアルト云此ハ鳴ク声小兒ノ如シ故ナリ

蘭山先生の話では、俗に山椒魚という。美作の国（現在の岡山県）ではハンザキと言われる。（中略）諸國採薬録では、木曾山中ではオギヤと鳴く声が子供のようだという。

上記の一節も他書からの引用である。この文では蘭山のオオサンショウウオについての記述が魚仙によって引用されている。地域によってオオサンショウウオが「山椒魚」と呼ばれたり、「ハンザキ」とも呼ばれると記されている。

現代日本においては、「大山椒魚」「ハンザキ」が主な呼称であるが、これらの記述を読む限り、江戸時代においては「鯢魚」がもっとも人口に膾炙した呼び名ということが読み取れる。

さらに本文には、図譜に描かれたオオサンショウウオがいつどのように発見され捕獲に至ったか、その詳細が記載されている。

今年六月十二日我水車ノ関口ラン枕ノ間ニ居タルヲ人アマタヨリテサマザマニ用意シテ捕獲タリ其形ハ図ノ如シ全軀ハ鮎ニ似テ鱗ナク四足アリ前ハ四指後ハ五指ニテ爪ナシ長サ四尺一寸圍一尺五寸惣身イボイボアリテ蟾蜍ノ如シ肌至テヤワラカニヌメリアリ色ハ黄黒ニテ斑アリ夜分声ヲ出ス實ニ小兒ノ声鳴カ如シ

今年六月十二日に、水車の間にいたのを大勢の人がそれぞれに用意し捕獲した。その姿形は図の通り。全体は鮎に似て鱗はなく、四足。前は四指、後ろは五指で爪は無い。長さは約155.8cm、胴回りは約57cm。全身にイボがありヒキガエルのように、肌はいたって柔らかくぬめりがある。色は黄黒で斑模様がある。夜は実に子供の声で鳴いているようだ。

今年6月12日とは1801(享和1)年、水車付近にいた個体を発見、捕獲の流れが詳しく書かれている。多くの人が集まり、かなりの大捕物となったことが読み取れる。体長がおよそ156センチと平均よりかなり大きく、数十年は生きているであろう長寿のオオサンショウウオと推測される。皮膚のぬめりや模様についても実物に忠実な記載があり、皮膚の柔らかさにまで言及していることから、魚仙はこのオオサンショウウオを実際に触ったうえで詳細を観察し、当時の興奮をそのまま文章に残したのではないだろうか。

ただ、この出来事が1801年に起きたのに対し、『水族四帖』がつくられたのは1855-57年頃、魚仙の没年は1859年または1869年とされており、時代に60年近い開きがある。仮に魚仙が1860年前後、80歳ごろまで存命だったと仮定すると、オオサンショウウオを目撃したのは20代前後だと推定される。

また、漢書からの引用と思しき文もある。

秦始皇力塚中ノ燈火ニ用ラレシ人魚ノ油トハ此魚ノ油ナリ此油ヲ用ユレハ減ル夏ナシ陶隱  
居力説ニ人魚ハ即鮓魚ナリト云ヨシ以上証類本中ニ見エタ

秦の始皇帝の塚の中の燈火に用いられた人魚の油とは、この魚の油のことである。この油を使えば減ることはない。陶隱居[陶弘景とうこうけい 456-536 中国南北朝時代を代表する医薬学者]は人魚はすなわち鮓魚のことだと言い、以上の内容は類本にて見た。

このように、半ば伝説のように伝え聞かれる内容も記されている。一方で、オオサンショウウオの特徴である皮膚のぬめりや色、形態への記述は一切ない。

一方で、「サンショウウオの味はアンコウに似て硬い」というオオサンショウウオの味についての記述も見受けられる。魚仙は毎日のように魚市場に通い魚類の写生、調査研究を行なったという<sup>12</sup>。このことから、市場の関係者とも親しく交流があったはずである。これらのルートからオオサンショウウオを実際に食した可能性は大いにある。

また、オオサンショウウオだけでなく、ハコネサンショウウオについての記述も詳しい。

箱根サンセウウヲ カシカヲトルサンセウウヲ大ナル者ハ他処ヨリ来ルナリ真ノ箱根産ハ至テトナリソレヲタテニ串ニサシテ賣ル効スケタリトテ價貴シ手ノキルルホトノ寒キ水中ニ居ルヨシ至テ稀ナリ

箱根サンショウウオ カジカを獲るサンショウウオ 大きい個体は他の場所から来たもの。真の箱根産はいたって小さい。それを縦に串に刺して売る。効き目に優れており、値段も高い。身を切るほどの寒い水中に生息。その為とても希少。

ハコネサンショウウオは本州に生息する小型のサンショウウオで、現代でも郷土料理として天ぷらなどで食す地域もある<sup>13</sup>。江戸時代、サンショウウオやイモリは漢方の薬効があるとして高値で取引され、魚仙が目にする機会ももちろんあったであろう。

## 第2節 小野蘭山『魚譜』

二つ目の図譜は蘭山編『魚譜』(1861年)である。約80種類の水族が記載されている。掲載種はヒラメ、ハタなど身近な魚類が中心だが、なかにはイトマキエイの一種と思しき大型の魚類【図11】、「人魚」と称したミイラの図<sup>14</sup>【図12】まで多岐にわたる。

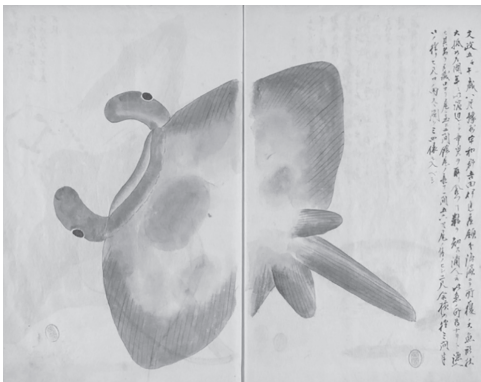


図11：『魚譜 エイ』



図12：『魚譜 人魚』

蘭山の教え子には、魚仙の長年の支援者となった狩谷掖斎もいた。魚仙と蘭山に直接面識があったかどうかは不明だが、魚仙は掖斎を通じ、蘭山の著書を見る機会があったと思われる。『魚譜』は、1861年の年紀が奥書に記載されている。表紙には「藤良山書」の記述が見られるが、詳細は不明である<sup>15</sup>。蘭山没後50年以上を経ての刊行だが、蘭山の業績をたたえるために関

係者が刊行したのか、原本は蘭山の生前にあったが失われ、転写本だけが残されたのだろうか。何れにせよ、現存する『魚譜』はこれ一冊のみである。

次に、『魚譜』に記されたオオサンショウウオについての記述も分析していく。まず特筆すべきはオオサンショウウオの項目の文章の多さである。他の図譜を見る限り、名称を記しただけのものや、形態や生息地について簡潔に記したものがほとんどで、1頁を解説に割いているのはオオサンショウウオのみである。1801年に板橋の水車にて捕獲されたオオサンショウウオについて、以下のように記されている。

右所図之魚今慈享和改元六月十二日石神井川之下流於板橋驛水車激水之邊捕之矣巨口微目  
全体皮膚滑而有黒斑色如栗殼又帶黃褐長四尺一寸圍尺有五寸吾邦俗所用之尺寸也四脚指前  
後五指

右図の魚は今年享和元年六月十二日に、石神井川下流の板橋駅の水車にて捕獲されたもの。口は大きく目は小さい。皮膚はぬめりがあり黒の斑模様、栗の殻のような黄褐色を帯びている。体長は約155.8cm、胴回りは約57cmある。前脚の指は四本、後ろは五本。

(『魚譜』、国立国会図書館デジタルコレクション、40頁)

こちらも魚仙と同じく、オオサンショウウオの身体の特徴を中心に述べられている。体長や胴回りの大きさも魚仙の記述と一致する。また魚仙と同様に、皮膚のぬめりや模様について詳細な記述があることから、実物を見た上で書かれた文であると考えられる。

一方で、捕獲されたオオサンショウウオの記述より多く分量が割かれているのが、他の和漢書からの引用である。以下では、その4つを列記する。

郭璞曰鯢魚似鮎四尺前似獼猴後似狗未考獼猴四指也否餘凡如綱目及諸書所說也徐々能陸行  
焉然未詳上樹

郭璞[276年-324年 中国西晋、東晋の文学者・ト者]曰く、鯢魚は鮎に似ており、はっきりとは分からないが体の前はサル[中国の尾の長いサル]、後ろはイヌに似ているという。綱目及び諸書の説では、地上を歩くことができ、木にも登れるという。

諸國採葉録云西國北國及木曾山山中秩父山中川澤皆産鯢魚似山椒魚甚大也 大者至八九尺  
云能上樹其声如赤子山人謂雄者不啼雌者能啼自清明至夏月有声立秋無聲木曾山中人呼之和

拳兎（ヲキヤウル）云

諸國採葉録には西國と北國及び木曾山山中〔現在の長野〕と秩父山中〔現在の埼玉〕の川や沢に生息する鮠魚はとても大きく、大きいものでは約2.4m～2.7mになるという。木に登ることができ、その声は赤子のようで、オスは鳴かず、メスは鳴くことができる。清明〔旧暦三月〕から夏までは鳴き、立秋を迎えると鳴かなくなる。木曾山中の人はオキヤウルと呼ぶ。

松岡恕庵曰鮠俗名山椒魚以魚以有椒氣故名形似鯰四足頭圓扁腹黃色尾漸細似海鰻皮色如蝦蟆近頭處有礪碗四足扁而駢指小者八九寸大者三四尺又一種

松岡恕庵〔1668-1746 儒家、本草学者〕曰く、山椒魚という俗名は、魚に似ていること、山椒の香りがすることが理由だという。形は鯰に似て、四本脚、頭は扁平で腹は黄色、尾は海鰻〔アナゴ、ウツボなど〕に似ており、皮膚の色はヒキガエルのように、頭には石のようなイボがある。足は平たく指は小さい。1mほどの大きい種もいれば、20cm くらいのもものもいる。

相州箱根湖中産山生魚（サンヤウ）与世不同云・・

相州の箱根湖産の山生魚は固有種と云う。

ここで強調しておきたいのは、郭璞や諸国採葉録からの引用は、非現実的な内容がほとんどを占めているということだ。とりわけ、体がサルやイヌに似ている、木に登ることができるなど、現実ではあり得ない、迷信のような記述がある。大きさが2.4メートルを超えるという内容も、現実にはありえないだろう。一方で、体の色や皮膚のぬめりについての記述は見当たらない。なぜこのように非実証的な引用も記載したのか。蘭山は、正確な情報を掲載することを第一に考えながらも、昔の人々はオオサンショウウオに対してこのような興味深い記録を残しているのだという事実もまた、読み手に伝えたかったのではないだろうか。

博物学が発展し、オオサンショウウオの形態を正確に伝える図譜が存在した江戸末期と異なり、昔は目撃者の話が興奮そのままに口伝され、広がるにつれて内容が大仰になり、人々の想像なども付加され、ついには本来あり得ない描述がなされていったのではと推測される。それと比較すると、松岡恕庵の引用は前者と比べ、正確にオオサンショウウオの形態の特徴を示している。少年時代、恕庵から直接本草学を学んでいる蘭山が、師の文を引用することはむしろ自然なことなのかもしれない。



### 第3章 『水族四帖』、『魚譜』、実物のオオサンショウウオに基づく比較と分析

これまで二葉のオオサンショウウオの図譜を、図像とテキストの両面から分析してきたが、本章ではそれを踏まえて、実物のオオサンショウウオの写真を交えながら比較対照する。

#### 第1節 図像による比較

一見、似通ったところのないかけ離れた表現に見える両図だが、図像分析により、共通する表現手法が2点確認することができる。

1つ目は顔、両図を拡大してしてみると、オオサンショウウオの特徴であるつぶらな目と大きな口に焦点を合わせて描かれていることである。両図とも、どこか愛嬌すら感じさせる描写で、特に口元は人が微笑んでいるようにも見て取れる。作者はオオサンショウウオをつぶさに観察しているうちに、奇怪な風貌の中に潜む愛らしさを見出していったのかもしれない。【図13】 【図14】

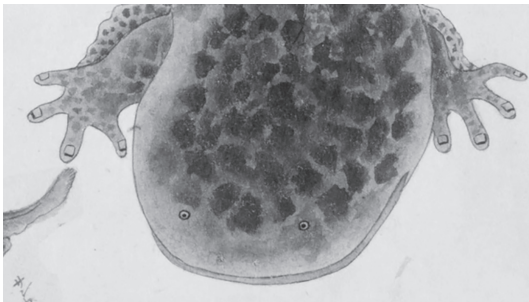


図13：『水族四帖 春 サンセウウオ』部分

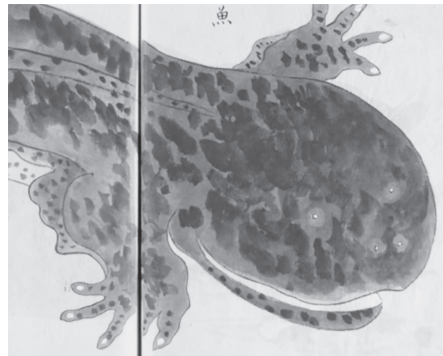


図14：『魚譜 鯢魚』部分

実物【図15】を見ても分かるように、大きな頭と口がまず目にとまり、見る側に強い印象を残すことがわかる。目と鼻に至っては、かなり近くまで寄り、観察をしなければ、それらの在処すら判別できない個体が多い。両図はそれらの特徴を捉えて描いていることから、きちんと観察と写生がなされた上での描写だということが読み取れる。

2つ目は指先の表現、指の数の正確さである。そのことは、しっかりと観察がなされている何よりの根拠となる。オオサンショウウオの特徴の一つである指先の白さも、両者ともに白い



図15：オオサンショウウオ（筆者撮影）

爪のような表現で表している。【図16】【図17】

【図16】【図17】を実物【図18】の指と比較してみると、両図が指先の表現まで神経が行き届いていることが見て取れる。特に魚仙は指先の丸み、手の厚みまで実に忠実に描いている。両図とも、なぜ人の爪のような指先の表現手法をとったのだろうか。オオサンショウウオの古記録には、「赤子の



図16：『水族四帖 春 サンセウウオ』部分



図17：『魚譜 鯢魚』部分



図18：オオサンショウウオ（筆者撮影）

よう」な姿形、鳴き声であるという記述が見られる<sup>16</sup>ことから、実際のオオサンショウウオから人間の赤ん坊の手との類似性を感じて、人の手に似通った表現に至ったのではないかと考えられる。

オオサンショウウオは古来より発見されるたびに、人のような形、赤子のごとき奇異な生物だと記録されてきた。現代においてはオオサンショウウオは両生類に分類されているが、蘭山や魚仙が生きた江戸時代

は、まだ西洋の分類学は浸透しておらず、オオサンショウウオは魚だと認識されていた。だが、いかに当時魚であると認識されていたとはいえ、タイやヒラメのような通常の魚類とは明らかに一線を画した容貌である。二図ともオオサンショウウオの指の表現に、実際には無い爪のように描いているのは、昔の人々が人のような生き物だと形容したように、どこか自分達人間にも似通ったような所もある、すなわちただの「魚」では無い存在だということを感じていたのであろう。

## 第2節 テキストによる比較

両図とも、解説にはかなりの分量を割いており、内容も充実したものとなっている。何について記述がなされているかここで確認しておこう。

『水族四帖』では、始めに本草学者(丹州、蘭山)の引用、1801年のオオサンショウウオ発見、捕獲の一連の出来事の詳細、続いて形態描写、皮膚感、色合いなど詳細及び漢書の引用、オオサンショウウオの味について、最後にハコネサンショウウオについて記述されている。

『魚譜』では、1801年のオオサンショウウオの大きさ、色など形態描写から始まり、漢書引用(郭璞、本草綱目など諸書、諸國菜葉録)、本草学者(怨庵)からの引用と続き、ハコネサンショウウオについての記述で締めくくられている。

両者の記述で最も注目すべき共通点の1つ目は、当時一大事件であったろうオオサンショウウオ発見の詳細記事である。また、どちらも実際にその現場を目撃していた可能性がある。魚仙は青年期に現場に居合わせたか、情報を聞いて駆けつけることもできただろう。蘭山は京の生まれだが1799年以降は江戸に移り住んでいたため、現場にいたか、若しくは現場を目撃した人から状況を伝え聞いた可能性が考えられる。さらに、両者ともオオサンショウウオのぬめりについて記述があるのも興味深い。どの動物でも、皮膚にざらつきがあるのか、ぬめりはあるのか、つるりとしているのかなど、実際にどのような質感なのかを図だけで確認することは難しい。図譜の作者が自身の目や手で皮膚の感触などを確かめて文章に記すことで、初めて図譜を見る人にも皮膚の特徴が伝わるのである。

2つ目は、ハコネサンショウウオについての記述である。蘭山はハコネサンショウウオが固有種(実際には、ハコネサンショウウオは箱根固有種でなく本州各地に分布)だという一文のみだが、魚仙はさらに大きさとし息環境、薬効に優れ高値であることも記述している。日本には小型のサンショウウオが約20種類生息しているが、他種のサンショウウオでなく両者ともにハコネサンショウウオの記述があるのは偶然とも思えない。ハコネサンショウウオは産卵時期に一斉に沢に集まることから、各地で頻繁に漁が行われ、黒焼きとして重用されていたという<sup>17</sup>。江戸時代の人々にとって、ハコネサンショウウオは薬として良く知られた種だったのだ

ろう。

## おわりに

本稿では、江戸末期における博物図譜のなかで、オオサンショウウオを描いた図譜の中から、1801(享和1)年6月12日に江戸石神井川にて捕獲された個体を描写したと思われる、奥倉魚仙と小野蘭山が残した二葉の図譜に着目し、同一の個体をどのように描き、何について記述がなされているかを分析、検証することで、同時代を生きた人々がオオサンショウウオにどのような思いを抱き、何を伝えようとして図譜を残したのか考察してきた。

現代日本において希少性が高く、人目に触れることの少ないオオサンショウウオは、ひとたび街中で発見されると大きなニュースになるほどの話題性を持つ。それは江戸時代でも同様で、同一個体の図譜が二葉現存していることは、オオサンショウウオ発見が人々の注目と関心を集めたという何よりの証拠ではなかろうか。魚仙と蘭山の図譜の詳細な記述からは、珍しい生き物を見たという1801年発見当時の高揚感がこちらにも鮮明に伝わるようである。

また、それぞれに工夫が凝らされている二葉の図譜のなかでも、特筆すべきは皮膚表現である。両図ともに雲母を用いることで、オオサンショウウオの大きな特徴の一つである皮膚のぬめりを見事に表現している。体にぬめりがあるという事実は、実物を見なければはっきりとは分からない。実際に第二章で明らかにしたように、和漢書からの引用にはぬめりについての記述は無く、魚仙、蘭山共に自身の言葉として記述している。図譜を製作するにあたって、特徴的な皮膚の表現が必要不可欠であると認識していたからこそ、描画に際し最適だと思われる雲母を用いた図像表現となったのだと考えられる。

これまで述べてきたように、博物図譜の大きな目的は生物の生態や形態を正確に記録し伝えることであり、江戸中期から末期にかけて大きな発展を遂げてきた。図譜は正確な記録が大前提となるが、魚仙と蘭山が残したオオサンショウウオの図譜は、興味深いことに目の前の情報をただ記録するだけにはとどまらない。普段目にするものがない、珍奇で不思議な生き物と遭遇した衝撃を限りなく詳細に記したうえで、古来より伝えられてきた伝説や逸話などに事実とは異なるデータも集積し、様々な情報のパッチワークでオオサンショウウオ像が成り立っているのである。

## 注

- 1 今橋理子『江戸の花鳥画 博物学をめぐる文化とその表象』講談社、2017年、126頁
- 2 玉蟲敏子編『博物画譜 佐竹曙山・増山雪斎』駸々堂出版、1995年、177頁。

- 3 田中優子『江戸の想像力』筑摩書房、1980年、77頁。
- 4 磯野直秀「珍禽異獣奇魚の古記録」『慶應義塾大学日吉紀要・自然科学』第37号、2005年、34頁。
- 5 同上。
- 6 同上、52頁。
- 7 HUFFPOST「京都の鴨川にオオサンショウウオ。大雨による増水で流されてきたか」  
[https://www.huffingtonpost.jp/2018/07/05/japanese-giant-salamander\\_a\\_23475841/](https://www.huffingtonpost.jp/2018/07/05/japanese-giant-salamander_a_23475841/)  
2019年7月30日閲覧。
- 8 文献によって没年の表記が1859年または1869年と二通りあるが、墓誌には「安政6年(1859年)8月12日没」と記載がある。  
時山弥八『関八州名墓誌』村田書店、1977年。
- 9 松井魁「水族写真と著者奥倉辰行(魚仙)の生涯とその業績」『宇部短期大学学術報告』第19号、1983年、34頁。
- 10 図譜原本に頁記載は無いが、国会図書館デジタルコレクションのサムネイルに基づき頁数を記載した。
- 11 松井前掲書、35頁。
- 12 狩野博幸『江戸の動植物図譜』河出書房新社、2015年、108頁。
- 13 尾瀬檜枝岐温泉観光協会(福島県)ホームページ「檜枝岐の郷土料理」より、以下抜粋。  
「檜枝岐の珍味として親しまれているサンショウウオですが、檜枝岐村で採れるのはハコネサンショウウオで、昔から漢方薬の原料として知られ、村の貴重な地場産品でした。サンショウウオを獲る人は複数の沢を持ち、その年漁をした沢は最低2年間は休ませ、資源の保護しながら生業としてきました。この村の珍味は旅館や民宿で味わうことができます。」  
<http://www.oze-info.jp/food/> 2019年7月30日閲覧。
- 14 江戸時代には、上半身に猿、下半身に鮭を用いるなどした「人魚」を称するミイラが見せ物として流通していた。
- 15 近世歴史資料館編『近世植物・動物・鉱物図譜集成』(諸国産物帳集成 第3期)第15号、科学書院、2010年、908頁。
- 16 日本書紀の記述として、「撰津国の堀江で、赤子のように、魚でもなく人でもないものを網で得る」とある。磯野前掲書、34頁。
- 17 かわいいクロサンショウウオ「サンショウウオの黒焼きの作り方」  
<http://xto.be> 2019年9月5日閲覧。